

3級 【シーチング組み立て】傾向と対策

<地直し・布目>

- ・持参したシーチングが厚すぎたり薄すぎたり、糊のききすぎたもの・腰のなさすぎるものなど、シャツブラウスのシーチング組み立てに適さないものを使用したため、シーチングの仕上がりがうまくいかず減点されることが多いので、標準的なシーチングを購入し使用することが望ましい。シーチングの地直しが不完全なためにシルエットがうまく出ないこともあるので、試験以前の課題として適切なシーチングを正確に地直ししてしわの出ないように持参するよう心掛けていただきたい。特に今回はパフスリーブ組み立てに厚手シーチングを使用したために不良になったものもあった。
- ・シーチングにパターンを描き写す方法として、パターンの上にシーチングをのせて定規を使用しトレースする方法が一般的である。パターンとシーチングの地の目を完全に合わせて、必要な箇所にプッシュピンや文鎮で固定し定規を使いトレースする。

<身頃>

- ・シーチングに写した出来上がり線に対して、正確に縫い代を記入して裁断するのが望ましいが、部分的に縫い代幅が狭くなったり広くなったりしているものがあり、シルエットを崩す要因になっている。シャツブラウスであれば、1cm前後の一定の縫い代幅を付けた状態で、切り込みを入れなくても収まる程度のカーブ線が縫いやすく、美しい仕上がりが期待できるので、縫い代幅は正確に（今回は裾がカーブしているため2～1.5cm、パフスリーブの袖口はカフスが付くため1cm、他も1cm程度）裁断して、アイロン処理することで実物の仕上がりに近いシルエットを出すことが可能と思われる。今回の課題はAラインのシルエットであるがストレートに近いものも合格の範囲とした。Aラインのシルエット表現が上手く出来ていないものや脇でウエストを絞っているために身頃にしわが入っているものがあった。
- ・シーチングのピン打ちは決められた方法があるわけではない。しかし、不正確なピン打ちでシルエットを崩すことは避けたい。一般的にシーチングのダーツ線や縫い目線は、どちらか一方を折って重ね、片倒しの状態に止めることが多く、上に乗る側のシーチングの折り目にピンを刺し、下のシーチングを少量（1mm程度）すくってピン先を斜め上に出す方法が、ピンのあたりが少なくきれいな仕上がりになる。縫い目線に対してのピンの方向も正解があるわけではないが、ピンを止めたことによってシルエットを崩している場合は減点となる。
- ・組み立てたブラウスをボディに着せ付けする場合、前中心・後ろ中心を合わせ、シーチングが着崩れないように必要な箇所にボディにピン打ちすることが望ましい。

<衿・衿付け>

- ・衿の地の目はたて地・よこ地でもよいとされているが、本来のシーチング組み立ての目的であるパターン修正に適した方法としては、後ろ中心をたて地にした方が適切と思われる。
- ・衿の外回りの縫い代は裁ち切りでもよいとされているが、特別な場合（微妙なカーブ線や形状の場合）以外は裁ち切りにしないで、縫い代が浮き上がらないようにアイロンでしっかり折り込んで、ピン打

ちはしない方が望ましい。衿付け線のピン打ちは、縫い目線のきわを衿付け線に沿って平行に止めるべきであるが、衿を身頃の裏側に止め付けたために衿ぐりの縫い代で衿の形を崩してしまっているものがあつた。

- ・衿の後ろ中心を止めていないために形が崩れてしまっているものもあるので、衿の外回りが落ち着く位置にピンを止める必要がある。

<袖・袖付け>

- ・パフスリーブは、袖口部分をぐし縫いをしてギャザーをアイロンで整えてから平面でカフスを止める方がやりやすくきれいにできる。
- ・袖付けのピン打ちは、縫い目線のきわを袖付け線に沿って平行に止めるべきであるが、ピン打ちの不備のために袖のシルエットを崩してしまったものが多かつた。
- ・いせをうまく配分し、きれいにピン打ちするにはぐし縫いをするなど、ある程度いせをセットする必要もあると思われる。

<ボタン（身頃）>

- ・ボタン位置とバランスはほとんどよくできていたと思われるが、まれにボタンの数の間違いや大きすぎるもの、小さすぎるものもあつた。

<ステッチ>

- ・パターン上のステッチはパターンの端と端に記入されていればよいが、シーチング組み立てにおいてはすべて記入されているべきである。
- ・ステッチがないもの、ステッチが途中までのものや、ステッチ幅が不備なため、減点されたものがあつた。